

比較文化論 : 大項目別報告 : 船 1700

著者	須藤 健一
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	67-73
発行年	1990-03-10
URL	http://doi.org/10.15021/00003687

船 1700

須 藤 健 一*

- | | |
|------------|--------------------|
| 1. はじめに | 3. カヌーの複合地域：スラウェシ島 |
| 2. いかだ、くり船 | |

1. はじめに

船に関する小項目の存在が確認されている民族例数は、いかだ（1701）が44例、くり船（1702）が68例、シングルアウトリガー・カヌー（1703）が67例、ダブルアウトリガー・カヌー（1704）が18例、ダブル・カヌー（1705）が21例、ゴンドラ型構造船（1706）が11例、樹皮船（1707）が5例、家船（1708）が9例、そして帆の利用（1709）が63例である。東南アジア島嶼部からオセアニアの船の分布に関しては、1920年代からハaddon (Haddon, A.C.) と ホーネル (Hornell, J.) によって明らかにされてきている [HADDON 1937; HORNELL 1920; 1936; 1946]。2人の研究は、船のなかでもアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーを中心にしたものである。

ハaddonとホーネルの研究成果によると、シングルアウトリガー・カヌー、ダブルアウトリガー・カヌー、そしてダブル・カヌーは、地域的に特徴的な分布を示す。

ダブルアウトリガー・カヌーは、インドネシアの島嶼部を中心に、北はフィリピン、東は西イリアン西部をかすめてトレス海峡諸島、西はマダガスカル島に分布する。

シングルアウトリガー・カヌーはマイクロネシアとポリネシアの全域とニューギニア南西部を除くメラネシア、インドネシアのニアス島、メンタウエー諸島、インド洋のニコバル、アンダマン諸島から西進し、スリランカ、インド南部をへて、マダガスカルにいたる地域に分布する。このカヌーの分布は、オーストロネシア語族の地域をおおう形で展開する。最近のドーラン (Doran, E. Jr.) の研究では、インドネシアのいくつかの民族とフィリピンのルソン島にも存在する（した）ことが判明している [DORAN 1981: 78]。

* 国立民族学博物館第1研究部

ダブル・カヌーは、ポリネシア全域とメラネシア東部（フィジー諸島とニューカレドニア）およびマイクロネシアのトラック諸島といった地域に集中する。ただし、ハッドソンとホーネルはトラックにダブル・カヌーが存在することを、今世紀初頭にドイツのティレニウス (Thilenius, G.) を中心としてマイクロネシアの島じまを調査した、ハンブルグ探検隊の報告書のイラスト図に基づいて指摘している。その図のダブル・カヌーは、たしかにカヌーの船体を二つつなぎあわせたものであるが、模型である。私の調査によると、それは、ダブル・カヌーとして実際の航海に使用されたものではなく、祖霊を勧請するために、家の棟木からつるす供物をそなえる台であることがわかった。つまり、供物台の飾りにカヌーの船体をもちいたにすぎない。したがって、トラックにダブル・カヌーが過去にも現在にも存在したという証拠はない。また、ほかのマイクロネシアの島じまでもダブル・カヌーが使用されたという痕跡はない。

ドーランは、ホーネルのポリネシア偏重の分布にたいし、考古学資料や古文獻の記述を手がかりに、ダブル・カヌーがメラネシアのソロモン諸島、ニューギニアの南東部、インドネシアのジャワ、スラウェシ島から、メコン川、黄河、揚子江のアジア大陸の大河流域にも存在したことを例示している (図1) [DORAN 1981: 40]。ドーランはダブル・カヌーがインドネシアにも存在する点を重視し、ダブル・カヌーがメラネシア、ポリネシアで特殊発展したという従来の見方に異議を唱え、アジア大陸からインドネシア島嶼、メラネシアを経てポリネシアへと連続するという仮説を提示して

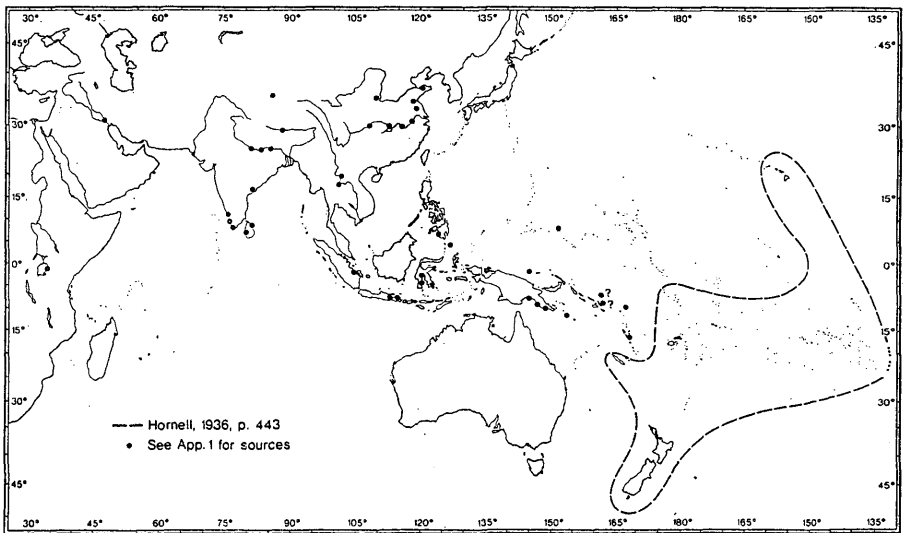


図1 ダブル・カヌーの分布
[DORAN 1981: 77] による

いる。そして船の発展史についても、いかだ→くり船→ダブル・カヌー→シングルアウトリガー・カヌー→ダブルアウトリガー・カヌーという展開を示唆している [DORAN 1981: 76-80]。

以上で述べたようにアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーの東南アジア・オセアニア地域にみられる分布は、前記の3人の研究者によって、詳細に判明している。したがって、本研究の結果によって、それらの分布についての新しい知見をうる可能性は、きわめて限定されることになろう。

2. いかだ, くり船

いかだ (1701) とくり船 (1702) の分布についてまず検討してみよう。いかだとくり船の分布に関して、すでに、ドーランの研究があり、かなりのことが明らかになっている (図2, 図3)。本研究の結果による、いかだとくり船の分布の様態は、図4と図5に示しておいた。まず、図2, 図3と図4, 図5とを比較してみると、つぎの2点を指摘できる。

1) いかだの分布においては、本研究の結果、アッサム・ビルマ、マレー半島、ボルネオ、中国南部で、図1に存在しない10民族がいかだを保有していることが明らかになった。とくに、マレー半島の採集・狩猟民、Semang と Senoi がいかだを使用

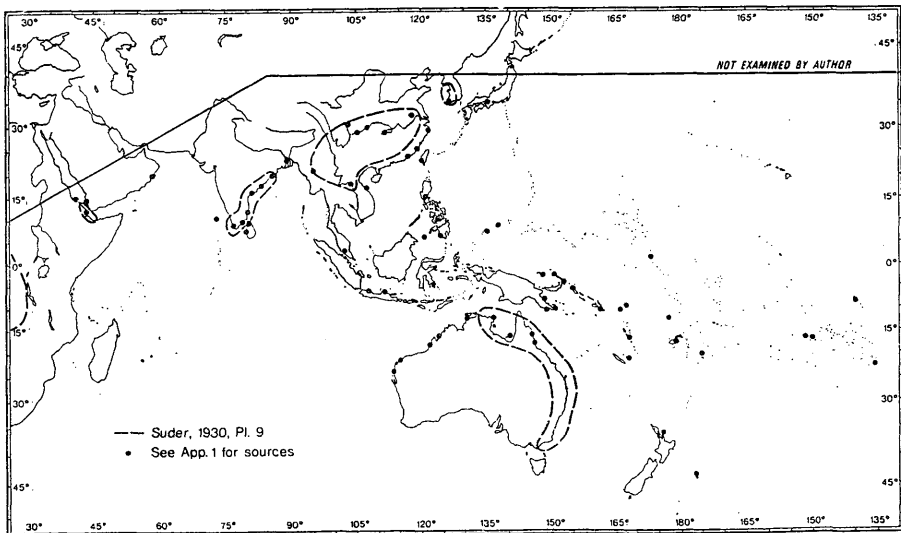


図2 いかだの分布
[DORAN 1981: 75] による

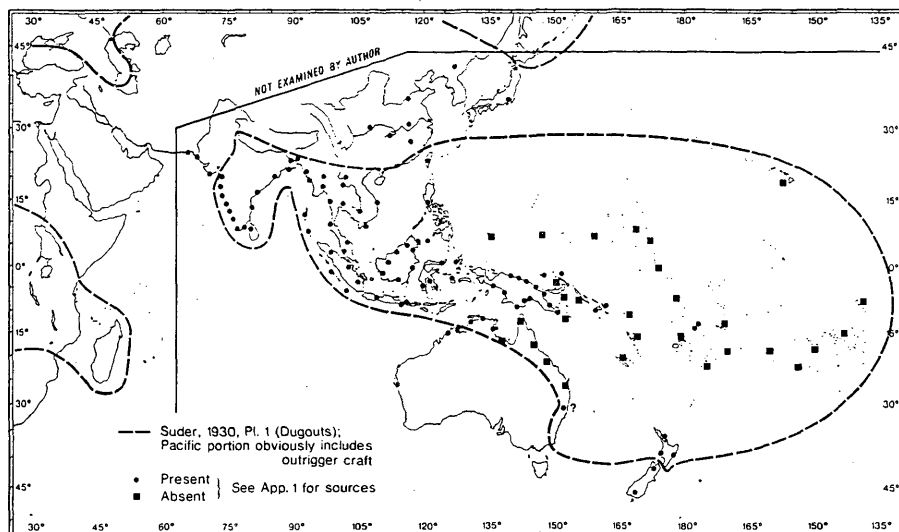


図3 くり船（アウトリガーなし）の分布
[DORAN 1981: 75] による

している点が注目される（図4）。

2) くり船の分布に関しては、ドーランの研究成果の方が広地域で多民族がくり船を保有していることを示している。ただし、本研究(図5)では、ボルネオの **Kelabit** と **Land Dayak**, **Sumbanese**, **Aru** 島民, 中国南西部の **Pai**, **White Tai**, **Mon** のあいだで、くり船の存在が新たに確認されている。

つぎに小項目の相関性をみることにしよう。この地域でいかだ(1701)とくり船(1702)の両方をもつ民族は17で、全地域に散発的に分布する。**Burmese**, **Vietnamese**, **Cambodian**, **Jarai** の大陸部に住む4民族は、いずれも河川でそれらを利用している。くり船とシングルアウトリガー・カヌー(1703)の組みあわせをみると、双方を共有するのは13民族、くり船とダブルアウトリガー・カヌー(1704)を共有するのは11民族である。シングルアウトリガーとダブルアウトリガーのカヌーが併存するのは10民族で、インドネシアに5、ニューギニアに3と、不思議なことにポリネシアの **Uvea** と **Easter** である。そして、シングルアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーをもつ民族は19例あり、そのなかに **Bugis** と **Makassarese** がふくまれる。外洋航海の推進力として不可欠な帆の使用については、ダブル・カヌーとの結びつきがもとも強く、90%の割合をしめす。以下、シングルアウトリガー・カヌーと家船の67%、ダブルアウトリガー・カヌーの61%とつづく。いかだとくり船においては30%にも満たない。

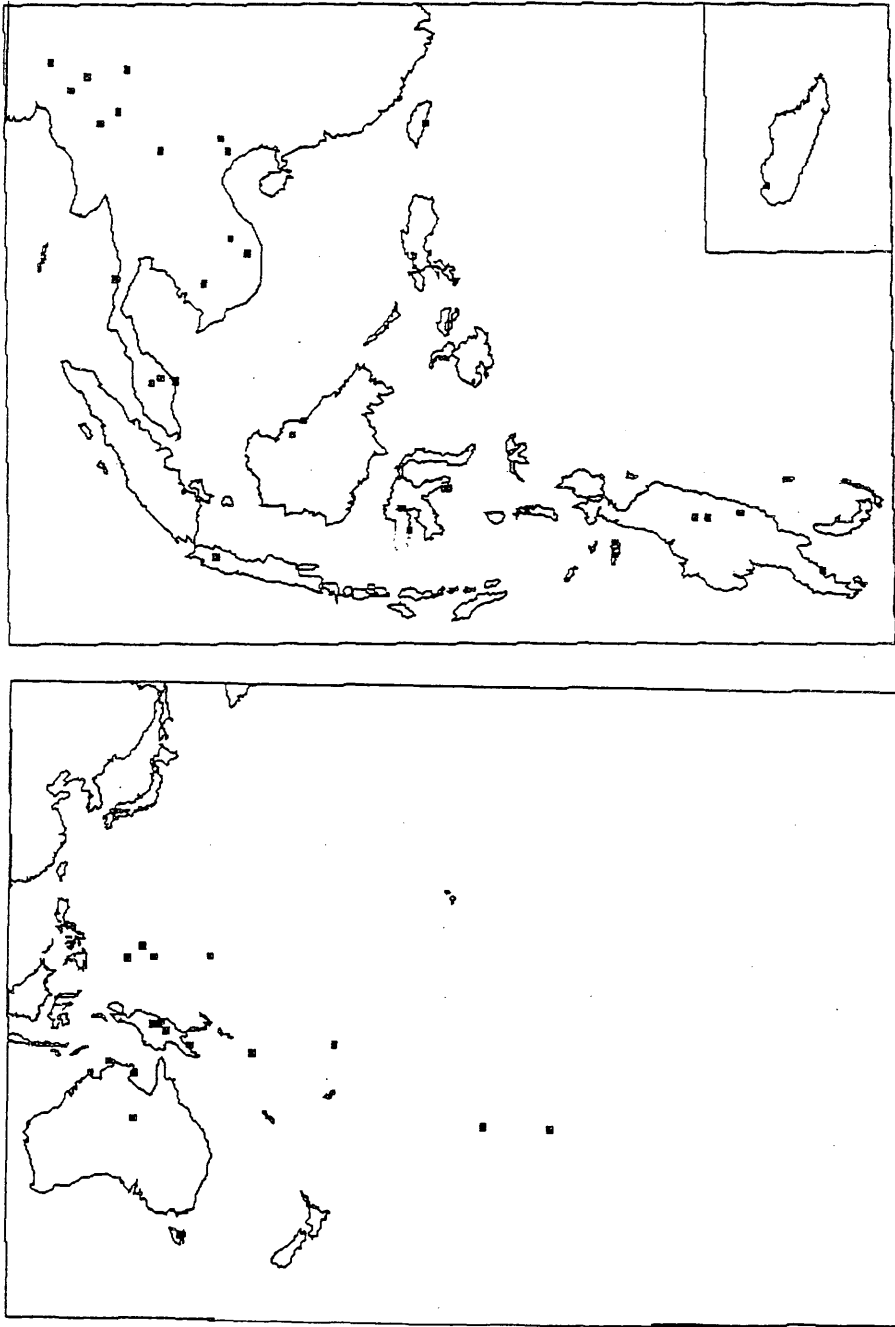


図4 本研究の成果によるいかだの分布

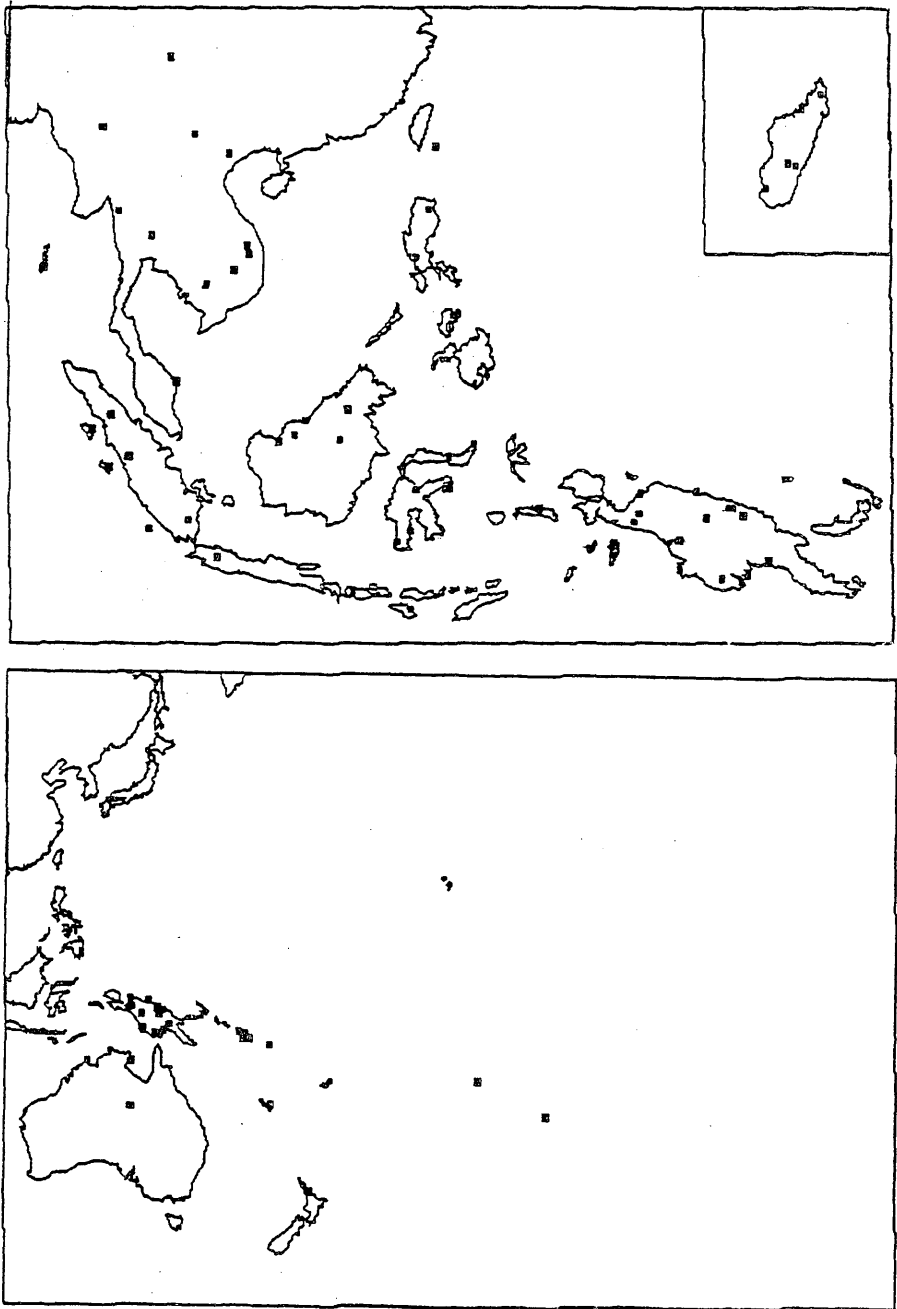


図5 本研究の成果によるくり船の分布

3. カヌーの複合地域：スラウェシ島

最後に、三つの項目間の相関関係についてみることにしよう。くり船、シングル、ダブルのアウトリガー・カヌーをもつ民族数は、Eastern Toradja, Bugis, Makassarese, Central Ceram, Kiwai, Waropen の六つである。そして、シングル、ダブルのアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーの3項目をもつのは、Bugis, Makassarese, Uvea, Easter の4民族である。

以上のことからつぎの3点を指摘できる。

1) いかだとくり船は、大陸部と島嶼部にまたがって存在するが、帆との相関が弱いことから、河川や海岸部での諸活動に主として使用される。

2) アウトリガー・カヌーは、島嶼部のみに存在し、大陸部には欠如する。ただ、ポリネシアの西端に位置する Uvea と東端の Easter との2島にダブルアウトリガー・カヌーが存在することをどのように解釈すればよいか、理解に苦しむところである。

3) Makassarese, Bugis は、くり船、シングルアウトリガー・カヌー、ダブルアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーの4項目を保有する。また、Eastern Toradja もくり船、シングルとダブルのアウトリガー・カヌーの3項目をもっている。

ここで注目されるのは、スラウェシ島の上記3民族は、そのほかにも多くの項目をもっていることである。Bugis と Makassarese には船の項目としてあげた9項目のうち樹皮船をのぞく8項目が存在する。また、Eastern Toradja もいかだ、ダブル・カヌー、ゴンドラ型構造船、樹皮船をのぞく5項目をもっている。スラウェシ島北部のボソ湖周辺に住む Eastern Toradja が3種類の船と帆もあわせもち、同島の南西部、パポロ周辺の Bugis や Makassarese のあいだではすべてのタイプの木造船をもち、かつくり船を3~4本つないだ船が使用されていたと報告されている [DORAN 1981: 77-96 (原典; Great Britain Admiralty 1944: 82), NOOTEMBOOM 1932: 112]。この複数の船体を横木で連結する船は、ダブル・カヌーの亜種とみなせよう。このことから、海岸部に住む Bugis と Makassarese, 湖沼地域に住む Eastern Toradja などが保有する(した)船の種類をみると、スラウェシ島には、くり船、アウトリガー・カヌー、ダブル・カヌーが存在することが明らかになる。したがって、くり船、2種類のアウトリガー・カヌーとダブル・カヌーが併存する(した)スラウェシ島は、船の分布、船の発達史、船の伝播などを研究するうえで、重要な位置をしめることを指摘できる。